

「アート&コミュニケーションで鍛える先がみえない時代のサバイバル術」

2019年11月17日（日）東京大学情報学環・福武ホール 福武ラーニングシアター

講師：福のり子 伊達隆洋 平野智紀(総合司会)

11月17日（日）に東京大学情報学環・福武ホール 福武ラーニングシアターで京都造形芸術大学アートコミュニケーション研究センターによる上記セミナーが開催された。その様子について報告したい。なお、敬称は略させていただいた。

このセミナーに2名の立場の異なる参加者があった。この参加者へのセミナー後のインタビューをもとに報告する。

一人は美術館関係者である。鳥根県安来市加納美術館の千葉潮（ちば うしお）理事は、私が代表を務める「みるみるの会」の対話型鑑賞に理解を示し、昨年度より当該館の企画展での対話型鑑賞会にも積極的に参加している。この鑑賞法に興味を持ち、私たちの活動の根幹をなすACOPについての情報を得、知見を深める場として、現在ワシントン在住の福の講演を聴くことができる機会は、大変に貴重で、重要な意味を持つと考え、参加した。

美術館での展示にも携わる千葉は、福のキャプションと作品との鑑賞時間の差異に衝撃を受けている。鑑賞者に良かれと思って説明事項を増やすことが、鑑賞者が逆に「作品をみない（作品をみる時間を奪っている）」という実態につながっていることを知り「ショックだった！」と述べている。そして、現在展示中の企画展では、館内関係者の不評にも負けず、極めて簡略化したキャプションに挑戦した。筆者も来館し、鑑賞したが、シンプルな情報提供で作品（陶器の茶碗が中心）ファーストになっており、作品そのものに向き合えた。千葉自身、来館者が作品と対峙する時間が今回は増えているように感じるとも述べている。

学芸員にとって展示作品に添える「キャプション」の制作は重要だ。しかし、その情報はあくまで作品に添えられるものであって作品そのものの理解ではない。福は「情報は常に書き換えられる可能性がある」とも語る。我々のよく知るギリシア彫刻は真っ白な大理石彫刻という認識があるが、実は「極彩色」であったという新説。情報は科学の進歩とともに日々刷新される可能性を秘めている。そのような不確定な情報に依らず、自らの目でみて、考えて、「鑑賞」する対話型鑑賞のもつ力を千葉も信頼し、今後の美術館経営に生かしたいと意欲を新たにしている。

もう一人は、広島県福山市立桜丘小学校の榛澤千咲（はんだわ ちさき）校長だ。桜丘小学校は来年度の広島県造形教育研究会の全体会場校であり授業公開校だ。この機をとらえ、対話型鑑賞で児童の「主体的・対話的で深い学び」を実現し学力向上をめざしたいと考えている。そのためには教師の授業改革が必至であるが、教師を説得するに足る対話型鑑賞の理論を持たない。今回は福の講演を聴き、自校の教師に向けて「論理的」に「対話型鑑賞」の効果を語りたいと考え参加した。しかし、それは意に反して榛澤自身の学びにつながっていく。福が講演の中で「アートを介した安心・安全なコミュニケーション」と語ったことで、「他者とのコミュニケーションから新しい自分と出会うこと」が対話型鑑賞の大きな魅力であると感じ、他者というだけで心を閉ざしてしまう自分の姿に気づく。「周囲の人や外界に対して心を開くとか、学ぶ」感覚の少なさ、「学びにしても、権威ある先生から然るべきありがたいお話を拝聴する」という受け身的で閉じた姿勢ではこれからの正解のない時代を生き抜いていく「学ぶ力」は得られない。「この対話型鑑賞、対話による学びは、外界に心

開き、他者の声に耳を傾けると、そこにはすばらしい新たな学びがあることを実感させてくれるものだ。」ということに講演をワークショップを通して気づいていく。そして「他者に対する感覚をネガティブにすることよりも、自分を豊かにしてくれる存在であると捉えることの方が人生を豊かに生きていけるのではないか。」と考えるようになる。それが『「人とかかわることで自己を高めていける」という意識をもつことは、外界に向けても、自分を見つめても、喜びや幸せをそこに見出すことができる。』という確信に変わる。

対話型鑑賞の醍醐味は他者の存在である。他者と共に同じものをみて、考え、話し合うことを繰り返すこの活動は、他者の存在なくしては成立しない。その他者を「自分を豊かにしてくれる存在」と捉え、他者を信頼し、心開くことが人生を豊かにしていくのだと感じることのできた榛澤は、自らの「学び」を自校の取組へと自信を持って変換し、推進していくことになる。

(執筆 出雲市立湖陵中学校教頭 春日美由紀)

(アート・コミュニケーション研究センター共同研究員)